

アクセル・アルマー(憑)
)は平穩に過ごしたい

ボートマン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

気づけばアクセル・アルマーになった男が平穩に過ごしたいと思いつつも、様々な状況によって中々過ごせない物語である。

外見アクセルでも中身はただの一般人！

さあ！平穩に過ごすことができるか!?

目次

第11話	70
第10話	60
第9話	52
第8話	46
第7話	37
第6話	33
第5話	26
第4話	22
第3話	14
第2話	9
第1話	6
プロローグ	1

第12話	74
第13話	80
第14話	87
第15話	93
第16話	99

プロローグ

「一体どうなっているんだ？」

何かの乗り物と思われる中で男は考える。

自分は確か強盗に刺されたはずなのに、気づけばどこかもわからない乗り物の中にいる。

「とりあえず外に出たいが、どうやって出るんだ？」

外への出方を探っていると、男はあることに気づく。

「俺の声ってこんな声だったけ？」

自分の声がいとも違う上に、どこかで聞いたことのある声になっている。

とはいえまずは外に出ることを優先あることにした。

「うーん、何かボタンがあるわけでもないしなあ」

出方がわからず、男はうんうん唸っていた。

すると、突然外の景色が映し出された。

「わっ!？」

突然映しだされた景色に驚く中、男はあることに気づく。

「森……?」

映し出された景色は何処かの森のようだ。

「外の景色が映し出されたけど、出れないとなあー」

そう呟いた瞬間、今度は目の前が開き出した。

「ふええええ!!」

いきなり開いたことに男は変な声を出してしまった。

「はあ……突然景色を映し出したり開いたりとか、驚かせることはやめてほしいな」

驚かす系が苦手な男にとっては、先程のことは心臓に悪いものであった。

「それにしても……さっきの映像でも見たけど見渡す限りの森だなっ!!」

後ろを振り向いた男は、ある物を見て再び驚いていた。

「な、何で！ヴァイサーガがここに!?!」

そこにいたのは漆黒の騎士を思わせる外観を持つ機体だった。

しかし、ヴァイサーガは現実には存在しないはずなのに、自分の目の前に存在している。

「待てよ……この顔は、アクセル!?!」

そして、ヴァイサーガの装甲に写る顔を目を凝らして見ると、そこに写っていたのは

アクセル・アルマーの顔だった。

「ど、どうして俺がアクセルに……」

最初に言っておくが、男は決してアクセルの様な顔ではなくどこにでもいそうな平凡な顔である。

「一体どういうことなんだ？もう何が何やら分からなさすぎる・・・」

強盗に刺されて死んでしまったと思えば、よく分からない乗り物に乗っている上に知らぬ場所を目を覚まし、しまいには自分が乗っていたのがヴァイサーガでアクセル・アルマーになっていた。

あまりの異常事態に男は頭を抱え出した。

「はぁ・・・誰でも良いからこの状況を説明してくれ——！！」

そして、どうすればいいか分からず叫んでしまった。

「はぁ・・・はぁ・・・よしよし落ち着こう。まずは落ち着くべきだ・・・」

深呼吸して息を整え、男は落ち着き始める。

「まずこれからどうすべきだよな・・・」

腕を組んで考えていると、視線はヴァイサーガに向かった。

「やはり・・・この世界について知る必要があるな」

現状での男の持ち物と言ってもポケットに入っていたナイフと拳銃に通信端末のみだった。

「あとはあれもだよな」

もう一つの持ち物と言えるか分からないが、ヴァイサーガも念の為持ち物に含める。

「よし！取り敢えずは移動しよう！」

まずは人がいる所に移動することに決めた男はヴァイサーガに乗り込んだ。

「よし機体に問題はない。あとは何処に向かうべきだよな？」

いざ行かんとしていたが、目的地も決めずに有耶無耶に向かうのは危険なためどうしようかと思っていると、足元に丸い物体があることに気づいた。

「何だこれ？さつきはいなかったなのに」

目が覚めたときにはいなかったのに、いつの間にかコックピットにいたのである。

不審げに丸い物体を見ると、丸い物体は突然跳ね出した。

「うわっ!？」

「アクセル！アクセル！」

「もしかして・・・ハロ？」

丸い物体の正体はガンダムでお馴染みのハロだった。

「何でハロがここに？・・・まさか！ハロ、この機体の強化パーツはお前以外は何だ？」

「アルティメット細胞！ソーラーパネル！」

「まじか・・・ということはこの機体は俺のスパロボAPでのヴァイサーガなのか？」

自分がプレイしていた時はヴァイサーガを選択し、強化パーツもハロ以外にアルティ

メット細胞やソーラパネルを装備していた。

「となると・・・機体の強化もMAXなのか？」

「MAX！MAX！」

男の質問にハロは淡々と答える。

「なるほど。なら・・・ハロ、ここから周辺の情報はわかるか？」

「マカセロ！マカセロ！」

「よし！なら人がいるところを探してくれ！」

「了解！了解！」

こうして男はハロのサポートの元、移動を開始するのであった。

第1話

Z月A日

ヴァイサーガで移動する中、ハロがこの世界について色々調べた。

この世界は大時空振動と呼ばれる現象により多次元世界と呼ばれているらしい。

その世界にはA E U、人類革新連盟、ブリタニア・ユニオンという三つの大国があるらしい。

その上、この世界には日本とエリアーと呼ばれる二つの日本があり、月も二つあり片方の月は陰月とよばれているらしい。

他にも暗黒大陸と呼ばれる大陸があるようだが、詳しい事はわからないが何かに阻まれて侵入できないらしい。

ここまでの情報を集めてくれたハロには感謝しきれないものだ。

今では頼りになるパートナーと言っても過言ではない。

Z月B日

この日、アクセルこと（そう名乗ることに決めた）俺は緊急事態に陥っていた。

それは腹が減ったことである。

寝ることに関しては機体の中で寝るしかないが、食事に関しては別だった。

眠っている間はハロが機体を管理してくれてるから大丈夫だが、食事までは用意できるわけがなかった。

空腹をどうにかすべく、辺りを調べると木の実を見つけた。

近くに着陸して機体を降りて、木の実を数個取って機体に戻りハロに食べれるか調べてもらった。

毒は無いと言われて食べたが、味はお世辞にも美味しいとはいえなかった。

とはいえこれしかないため我慢して食べた。

この日、次はまともな物を食べると心に誓った。

Z月C日

今日も昨日取った木の実を食べながら移動していると突然攻撃された。

いきなりの攻撃にびっくりしてしまい、攻撃先を調べると地上からの攻撃だった。

MSと思われる見たことのない機体が三機が、こちらに左腕の滑空砲を向けていた。

最初逃げるべきかと思ったが、ヴァイサーガの試運転というべきかこれから備えて一度戦うことにした。

その瞬間、アクセルの脳内にこの機体の戦い方が浮かび上がってきた。

腰の五大剣を掴むと、初めて使うはずなのにまるで前から使っていたような感覚だっ

た。

思わずニヤリとしながら三機に向かって突貫する。

とはいえ、こちらとしては命を奪う気は無いので武装を破壊して戦闘不能にすることに決めた。

五大剣をすれ違いざまに抜き、三機の滑空砲を腕ごと斬っていた。

あまりの手際の良さに驚き、そのあとは急いでその場を離れた。

Z月D日

俺は怖かった。

自分は戦いなんてしたことなかったのに、昨日の戦闘では当然のように戦えた。

最初はアクセルになった時、嬉しかったが今ではよくわからない。

このままアクセルとして戦うべきなのか考えている。

だが、戦いは嫌だからといって死のうとは考えてはいない。

ならどうすべきか考えた結果、俺は何が何でも平穏な生活をして見せることを決意する。

そのためにはまずある物が必要なため、俺はある場所に向かうのであった。

第2話

Z月E日

俺はエリアーイーに向かっていた。

何故エリアーイーに向かうかというと、お金を働いて稼ぐためだ。

最初は他の場所でも稼ぐことは出来そうと思っていた。

だけど、もし身分を示す物を提示しないといけない場合、示す物がないため稼ぐことができるかわからない。

探せば働かせてくれる場所はあるかもしれないが、それを探すのに時間がかかってしまう。

しかし、エリアーイーなら安賃金でも働かせてくれる場所があるかもしれない。

もちろんゲットーと呼ばれるスラム街でだ。

Z月F日

無事にエリアーイーのゲットーに潜入することができた。

当初はバレないか緊張したが、外からの攻撃を考えていないのか全く警戒されていなかった。

あまりの警戒心のなさに呆然としてしまった。

そうして機体を隠せそうな場所を探すことにした。

何処も戦闘によって建物が破壊されてて酷いものだった。

そうして探していると無人の廃倉庫を見つけた。

廃倉庫に機体を隠し、最後の木の実を食べた。

俺はいつも通りの不味さを堪えつつ、明日は必ずお金を稼いでみせる。

Z月G日

嬉しいニュースと悪いニュースがある。

嬉しいニュースは無事働き口を見つけた。

バトリングと呼ばれるアーマードトルーパー通称ATとナイトメアフレーム通称K

MFが格闘する試合のことだ。

このバトリングでは賭け事が行われており、観客はよくやっているようだ。

そのバトリングで俺は働くことになった。

悪いニュースはそのバトリングに選手として出ることになった。

何でだよ!?

働き口を探して歩いていたら、突然知らないおっさんに話しかけられた。

最初は怪しいと思ったよ。

いい金稼ぎの方法があると言われて怪しんだよ。

でも、ここでこの誘いを断つたらすぐに働ける場所が見つかるかわからなかった。

そういう悩みに悩みに首を縦に振り承諾してしまった。

でも、選手とは思わなかったよ。

てつきり雑用とかそういうのを考えていたのに。

こうして俺はバトリング選手として戦うことになってしまった。

ああ、俺は平穩に過ごしたいのに……。

「はぁ……」

「何だ溜息なんか吐いて」

俺を誘ったおっさん、ゴウトが話しかけてきた。

「何、やはりこういういったことには慣れてなくてな」

本当は戦いなんて嫌だが、そんなこと言えるわけないのでどうにか誤魔化す。

「そうかい。しかし、ワシと契約した以上は勝って貰わんと困る」

「わかつてる」

「あの時ワシはお前を見てピンときた。こいつは只者じゃない、相当の腕を持ったパイ

ロツトだつてな」

「(本当かな?)」

誰にでも言つてそんな気がすると俺は思った。

「お前は金が必要だった。俺はそんなお前の手助けをする」

「その代わりにお前は試合の報酬の分け前を頂くとということか」

「ああ、その通りだ。お前にもちゃんと金が入り、こつちにも金が入る」

確かに悪くないように聞こえるが、それは勝てばの話である。

「それと今回はお前以外にもう一人出る奴がいる」

「誰なんだ?」

自分の他に出る選手が気になり尋ねる。

「キリコつて言う無愛想な奴だよ」

「キリコ・・・か」

「ん? お前あいつの事知っているのか?」

「いや、初めて聞く名だ」

何処かで聞いた覚えがあるが思い出せない。

「まあいい。それでお前は何に乗るんだ?」

「そうだな・・・」

これからの機体に乗るか聞かれ考える。

自分にとって極めて大切なことであるため、真剣に考え始める。

A Tは機動力はあるが、装甲は薄く救命装置は除外されている。

K M Fはこちらも同じく機動力はあり、装甲は薄くなく救命装置等は除外されていない。

「K M Fだ」

A Tに比べてK M Fが比較的安全そうな気がするのでK M Fにした。

「そうか。なら機体はこつちで用意しておくから待っていてくれ。キリコにも説明しなきゃいけないんでな」

「わかった。気長に待つとするよ」

ゴウトと別れて一人待つ中、俺は緊張で体が震えていた。

二度目とはいえ戦いのたの字も知らない一般人であるため、内心では棄権したいと思っている。

「おい！機体の準備ができたぞ！」

そうして待っているとゴウトから呼び出された。

こうしてアクセルの二度目の戦闘が始まるうとしていた。

第3話

Z月H日

昨日は大変だった。

バトリングの選手となって初試合があんなことになるとは。

俺とキリコの対戦相手は、ゴウトが持つコネでイレブンの赤い悪魔と呼ばれるKMF
乗りと対戦することになった。

会場に入って相手を待つと、会場に現れたのKMFではなくATだった。

バトリングの上役と思わしき男が何かいちやもんをつけてきて、ATが出てきたがあ
の時は迷惑だった。

現れたATをキリコは難なく撃破し、俺もどうにか撃破することが出来た。

アクセルの体が戦いの仕方を覚えていたのか、あの時はどうにか戦えてホツとした
よ。

そして、本来の対戦相手であったイレブンの赤い悪魔が登場した。

赤という色がつくだけあって、機体の色も赤だった。

俺は一瞬某彗星さんの顔を思い浮かべたが、乗っていたのは少女だった。

俺とキリコは少女と戦っていたが、そこにまたもや横槍が入られた。

しかも現れたATは勝手なことを言って実弾を撃ってきた。

赤いKMFに向けて実弾が撃たれ、俺は咄嗟に前に出て庇った。

実弾は機体に命中して動かなくなっただけ、女の子を守れたから後悔はしてない。

余計なことだったかもしれないけど……。

その後は新たに現れた機体と武器を渡されたキリコ達とATの戦闘が始まった。

彼等が戦っている間、俺は機体から降りるとすぐさま会場を出た。

こうして俺のバトリング初試合は幕を閉じた。

乙月I日

結局お金を稼げなかった俺は、空腹を我慢しながら再び金稼ぎの方法を探していた。

とはいえ、昨日のバトリングの騒ぎの影響なのか。

ゲッターはピリピリしている感じだった。

治安警察に正規軍もゲッターを警戒しているのが関係しているのだろう。

そんな俺は昨日は金を貰えず食べ物を買えなかったため、何も食べてないからあまり

元気が出なかったよ。

そんな俺に誰かが話しかけてきた。

また怪しい勧誘かと思っていたら、話しかけてきたのは紅い髪の少女だった。

俺の記憶が確かなら、その少女はバトリングのイレブンの赤い悪魔と呼ばれていたKMFのパイロットだ。

どうして少女が俺に話しかけてきたかわからず考えていると、我慢できなかつたのか腹が鳴ってしまった。

しばらく場が静まり、俺はこの場から逃げ出したかつた。

女の子に腹の音聞かせるなんてめっちゃ恥ずかしい。

見れば少女はどうか笑うのを堪えていたよ。

よし回れ右で逃げよう。

すぐさま回れ右しようとする、少女が謝って止めてきた。

少女は少し待つように言つてこの場を離れた。

流石にこの場を離れるのは失礼だと思い待つことにした。

そうして待つっていると、手にパンと水を持って少女が戻つてきた。

先程のことを笑つた詫びとバトリングで助けてくれたことに対しての感謝を含めて渡してくれた。

俺は少女からパンと水を受け取ると、パンを大きく頬張る。

美味しい、パンってこんなに美味かつたかな？

合間に水を飲むと、水も美味しく感じられた。

久しぶりのまとも食事に涙が出てきそうだったよ。

食べ終えた俺は少女に対して感謝してもしきれなかった。

このゲッターではパンと水だけでもかなり貴重な食料だ。

そんな食料を分けてくれたことに嬉しくもあり申し訳なかった。

それから俺は少女こと紅月カレンとお互いのことを話していた。

カレンは日本をブリタニアから取り戻そうとレジスタンスとして戦っているらしい。

バトリングでは活動資金と操縦技術を鍛えるために出ていたそうだ。

カレンから俺のことを聞かれ、実は俺アクセルになったんですよと言えるわけがな

い。

なので突然この世界に転移して放浪していたという設定で話した。

俺の話にカレンは信じてくれて、俺としては嘘を言っているので心苦しかった。

そのあとカレンはレジスタンスの元に戻り、俺もヴァイサーガのところに戻ろうとす

るとまた呼び止められた。

呼び止めたのはゴウトだった。

なんでもせつかく契約したのに試合が無茶苦茶になったことに対し、その詫びで少し

だがお金が入った袋を渡してきた。

断ろうかと思ったが、今はお金が必要なのでありがたく貰った。

そうしてゴウトと別れ、ヴァイサーガに戻った俺はもう寝ることにした。
明日も稼ぎ口を探すか。

そう思い俺は寝るのであった。

「んんっ?」

寝ていた俺は外の騒音に目を覚ました。

「何だ?」

外が騒がしく確認しようと機体を降りて外を覗いてみる。

「何じゃこりゃー!?!」

何と外では戦闘が起こっていたのだ。

急いで機体に戻り、もう一度外を覗く。

「何で・・・?」

外では変わらず戦闘が続いていた。

戦っているのはブリタニア・ユニオン正規軍とレジスタンスだった。

「どうするべきか?」

この状況での選択肢は3つある。

1、隠れてやり過ごす

2、戦闘に参加する

3、戦わずに全力で逃走する

2は戦いたくないから却下。

1は見つからなければ問題ないが、見つかったら2に移行してしまう。

3は逃げ切れると思うが狙われるのは確実である。

「どうしようかな〜?」

頭を抱えて外を見ると、そこには見慣れた機体があった。

「え? ウイングガンダムにガンダムデスサイズ?」

それはスパロボAPでは出なかったが、興味が出てアニメで見た機体だった。

「しかも、あれは・・・カレンなのか?」

もう一つはバトリングでも見た赤いグラスゴーだった。

あの色の機体はあまりないためしつかりと覚えていた。

「……………見過ごすわけにはいかないよな」

カレンには食べ物の恩がある。

それに女の子が戦っているのに、男がしつぽ巻いて逃げるわけにはいかない。

「……………」

俺は気合を入れ、ヴァイサーガは廃倉庫を突き破って戦場に向かう。

「ああもう！鬱陶しい！」

カレン達はブラスタのパイロットであるクロウや二機のガンダムのパイロットであるヒイロとデュオに、キリコの力を借りて軍が非公式に開発した毒ガスを奪おうとした。

だが、結果は失敗してしまい現在軍と交戦していた。

突然通信してきた謎の男の指揮により、伏兵は排除できたが敵は増援を出してきた。いくらガンダムやブラスタのような高性能の機体がいようと数では相手が上のため苦戦していた。

建物を盾にして敵の様子を窺っていると、遠くの廃倉庫から何かが飛び出してきた。飛び出してきた何かはビルの屋上に着地した。

それは漆黒の騎士を思わせるような外観の機体だった。

「敵？それとも味方なの？」

敵か味方か分からず様子を見てみると、漆黒の騎士はビルを飛び降りた。

漆黒の騎士はそのまま敵部隊の方に向かうと、腰の剣を抜きざまに斬りかかった。

ユニオンフラッグやサザーランドは頭部や脚部を中心に斬られていた。

「味方なの？」

そのまま次々と敵機に斬りかかり、戦闘不能へとさせていた。

『何をしているこの機を逃すな！一気に畳み掛ける！』

通信機からの声にカレンは戦闘中だったことを思い出す。

「わ、わかっている！」

一体何者かわからないが、カレンは漆黒の騎士が頼もしく思えた。

第4話

Z月J日

あゝやってしまったな・・・。

俺はエリアーでカレン達を援護するために参戦した。

だけど、俺ってあんなノリノリに戦う性格だっけ？

なんだろう、俺は戦うと最高にハイってやつだー！って見たいな感じなのかな？

それとも普段気弱な人がバイクに乗ると人が変わる感じなのかな？

何はともあれ暴れすぎてしまった。

カレンからは何度も呼び止められたけど、パイロットが俺だとバレるわけにはいかな
い。

そのためあの後エリアーをそのまま脱出した。

今はアジア方面に身を隠している。

しばらく様子を見ながら、また働き口を探そう。

うん、そうしたほうがいい。

Z月K日

各地を転々として働き口を探すもそう簡単には見つからなかった。

俺が探している合間にハロにこの世界で注目されているニュースを調べてもらった。

エリアーで見たウイングガンダムから、おそらくこの世界に他にもガンダムやスーパーロボットがいるはずだ。

そうして調べてもらった結果、案の定この世界にはソレスタルビーイングと呼ばれる組織にガンダムがあるらしい。

他にもマジンガーと言ったスーパーロボットが存在していた。

この情報を見て、改めてこの世界がスパロボの世界であることを実感したよ。

ちなみにヴァイサーガは晴れてテロリストとして認定されてしまった。

やっぱりかチクショー！

はあ・・・まあ大国の軍と戦ったから仕方ないけど、こうなるとわかってても辛いよ。

そんなふうと考えていた俺はまさかあんなことになるとは思わなかった。

俺はゴウトから貰った少ないお金で買った食料を食べていた。

「はあーやっぱりそう簡単に決まらないなあ」

働き口を見つけないと、このままではゴウトから貰ったお金が底をついてしまう。

「早く見つけないと」「メール！メール！」「つなぐ！」

次の街に移動しようとする、突然ハロが叫び出した。

「め、メール？」

「メールキタ！メールキタ！」

「一体誰が？」

どうやって自分の居場所を突き止めたのかわからないが、とりあえずメールを読んでみる。

メールにはこの座標に向かえしか書かれていなかった。

「ハロ、この座標が何処か調べてくれ」

「了解！了解！」

「一体何処なんだ？」

「座標特定！座標特定！」

ハロが座標を特定したので何処か聞いてみよう。

「それで、一体何処なんだ？」

「エリアーノアツギ！エリアーノアツギ！」

「エリアーって・・・ウソく！？」

少し前にエリアーを出たばかりなのに、また行かなくてはいけないのだろうか。

「出戻りかよ・・・」

もしこのメールの送信主が俺がエリアー11を出るのを見越して送ったとしたら、本当に酷い嫌がらせである。

とはいえ、行かなければこのメールの送り主は何をするかわからない。

「行くしかないか・・・」

俺は諦めてエリアー11に戻ることにした。

第5話

乙月七日

また戻ってきた・・・

エリアーに戻ったが、今回は潜入するのが大変だった。

調べるとこのエリアの総督が代わったらしい。

ゼロという変な仮面の男か女かわからない奴が前総督を暗殺してしまって、新しい総督がこのエリアに赴任したらしい。

その新しい総督が前総督違い、現状維持を良しとせずにはビシバシと改革している。

そのせいかここに潜入することに苦労したよ。

はあ、前と違って警備が厳しすぎるよ。

こんな苦労して潜入してアツギに何があるんだろう？

何も無かったら絶対に許さん！

あ、でも戦いとかそういうのは望んでないからね！

フラグでもないからね！違うからね！

ひっそりと目的の座標に進むと、そこでは戦闘が起きていた。

「……………」

また戦闘に巻き込まれる事態にアクセルは泣きたくなかった。

「何でまた……………」

戦っているのは見たことない黒い生物（確か・・・次元獣だっけ？）とエリアーで援護したレジスタンスに、見慣れない戦艦とサーフボードみたいなのに乗っている機体だった。

だが、今のアクセルにはどうでも良かった。

「気付かれてないし、帰ろうかな」

こっそりこの場を離れようとしたが、次元獣の1体がこちらに気づいて向かってきた。

「ちっ！烈火刃！」

向かってきた次元獣に烈火刃を投擲する。

次元獣に烈火刃は命中して燃え上がったが、そのせいでアクセルがいることがバレてしまった。

「どうしよう……………」

「新タナ反応接近中！接近中！」

逃げ切れない状況の中、頭を抱えているとこの戦場に接近する機体をハ口が探知した。

現れたのは4機の見慣れないガンダムと鷹のような機体に、アクセルも知っているゲッターロボだった。

「あれ？なんか、ちよつと違う？」

ただ、アクセルが知るゲッターロボとは少し違う様に思えた。

あの一団も次元獣を狙っているようだ。

「はあ、どうにか逃げられないかな・・・」

周りが次元獣に気を取られている隙に逃げようと考えていた。

ところが、他とは違い白色の次元獣が襲ってきた。

「ちよつ!?!」

咄嗟に回避したが、白色の次元獣は何故かヴァイサーガを執拗に攻撃してくる。

「え、待つて！俺なんか恨まれる事した!?!」

狙われる理由がわからずアクセルは狼狽えながらも、どうにか攻撃を回避したり五大剣で防御する。

だが、次第にアクセルには沸々とイライラがこみ上げてきた。

「ああ！もう！鬱陶しい！」

執拗に攻撃する白色の次元獣に五大剣を横薙ぎに叩きつける。

「さつきから鬱陶しいんだよ！」

ヴァイサーガは五大剣を上段に構える。

「地斬疾空刀！斬り裂けい！」

そして、ヴァイサーガの必殺技の1つである地斬疾空刀を白い次元獣へと放った。

衝撃波は白い生物に命中して大きなダメージを与えた。

だが、当たる直前にバリアみたいなものにより、威力が軽減されてしまい倒すには至らなかった。

アクセルは白色の次元獣を追撃しようとするも、白色の次元獣の姿はなかった。

「逃げられた？」

白色の次元獣は何処かに逃げ、残る次元獣もソレスタルビーイング達やレジスタンス達によって撃破されていた。

そんな彼等が次にとった行動はヴァイサーガを囲んでいた。

「え？何で・・・？」

突然囲まれたアクセルに通信が入ってきた。

「（こちらの指示に従ってもらう）」

通信には若い少年の声が入ってきており、通信先は青と白のガンダムからだった。

「絶対に逃げようとしたら攻撃してきそう」

どうすべきかアクセルは迷っていた。

このまま指示に従えば確実に顔を合わせることになる。

そうしてなし崩し的に彼らと同行して戦場を行き行きする可能性がある。

そんなのは平穩に過ごしたいアクセルにとっては御免被ることだ。

だが、逃げようとすれば彼らは攻撃してくるだろう。

「(どつちを選んでも面倒なことには変わらないが・・前者よりは後者の方がましだ)」
意を決したアクセルは通信をしてきたガンダムに突貫する。

「何ー！」

いきなり突貫してきたヴァイサーガに青色のガンダムは驚き、一瞬だが動きを止め
しまった。

そのまま横を通り抜けるが、すぐに落ち着いた青色のガンダムが動きを止めようと接
近してくる。

「そらよー！」

そんな青色のガンダムにヴァイサーガは烈火刃を投擲する。

「くっ！」

青色のガンダムは烈火刃を回避するために動きを止め、ヴァイサーガはその隙を見逃

さず全速力で逃走する。

距離を開けることができたがそう簡単に逃すわけでもなく、今度はオレンジ色の可変型のガンダムが接近してくる上に、緑色のガンダムがスナイパーライフルを構えて狙撃してきた。

「逃すわけにはいかない！」

「悪いが狙い撃つぜ！」

「ええい！ハロ、被害状況は？」

緑色のガンダムの狙撃が命中し、被害状況をハロに聞く。

「損傷軽微！損傷軽微！」

ABフィールドの役割を持つマントのおかげか、狙撃の威力を軽減してくれた。

だが、オレンジ色のガンダムが動きを制限しようと周囲を飛び回って攪乱してくるため、このままではまた狙撃が命中する上に青色のガンダムに追いつかれる。

「どんなカラクリかわからねえが、次は決めるぜ」

緑色のガンダムが再び狙撃しようと構える。

「ハロ！狙撃の軌道を計算できるか？」

「出来ル！出来ル！」

「ならやってくれ！」

「了解！了解！」

ハロが緑色のガンダムの狙撃の軌道を計算する間、少しでも距離を開けようと移動する。

「計算完了！計算完了！」

狙撃の軌道が送られると同時に、ピンク色のビームが向かってくる。

「でえええい！」

そのビームに対してヴァイサーガは五大剣を引き抜くと同時に切り払った。

「嘘だろ！」

そのまま五大剣をオレンジ色のガンダムに叩きつける。

「ぐっ！」

そして、怯んだ隙を見逃さず全速力でこの戦場を離脱する。

「置き土産だ！」

追ってくる青色とオレンジ色のガンダムへと烈火刃を投擲する。

2機のガンダムは烈火刃を回避するために動きを止めてしまい、そのせいでヴァイサーガが戦場を離脱することを許してしまった。

こうしてアクセルは無事と言えるか分からないが、戦場を離脱することが出来たのであった。

第6話

Z月M日

に、逃げ切れた〜！

本当にやばかったよ・・・怖かったよ・・・

やっぱりガンダムって名前がつく機体は強すぎだよ。

ハロと機体フルに改造してなかったら危ないところだった。

いくら機体が強くても乗ってるパイロットはただの一般人なんだよ〜。

とりあえずエリアーをそのまま脱出することができた。

正規軍は時空振動の対応に追われていたから、今回も脱出することができた、よかった〜。

そのあととは出来るだけ遠くに逃げた。

なるべく人気のない場所で休み、機体の修理や警戒をハロに頼んで俺は寝ることにした。

それにしてもあのメールを送った奴、絶対に許さんぞ。

乙月N日

またメールが来た。

しかも今回は送信者の名前が書かれていた。

ボートマンと書かれており、前回のメールを送ったのもこのボートマンだった。

またメールを送ってきてふざけんなと思ったよ。

こつちは前回のメールのせいで大変だったんだから。

とはいえ念のためメールを読んでみると、今度は暗黒大陸に向かうようにと書かれていた。

ちよい待てふざけんな！

何で俺はお前の指示に従わないといけないんだよ。

そう思い読むと続きがあり、指示に従ってくれるならある座標に置いてある何かを渡すことが書かれていた。

正直どうすればいいか悩む問題だった。

相手はヴァイサーガへ連絡を取る相手だ。

前回とはかく従ったほうがいいと思って、エリアーのアツギに向かった。

でも、今回は従うべきか従わないべきか悩んでしまう。

俺としては座標にある物が気になった。

そうして考えた結果、今回も従うことにした。

はあ・・・自分で決めたこととはいえ、また平穩から遠ざかっている気がする。

Z月〇日

暗黒大陸に向かう前にまずメールに書かれていた座標に向かった。

なるべく軍などに見つからないようにコソコソ移動した。

そうして座標に到着すると、その場所にはアタツシユケースが1つ置かれていた。

とりあえず危険物が調べてみた。

何故か知らないはずなのに俺はテキパキと調べることができた。

やっぱりアクセルの体が覚えてるのかな？

調べ終わるとケースには何も細工はされてなかった。

開けてみたら空でした〜というわけでもなく、中には何とぎつしりとお金が入っていた。

メモが貼っており、指示を受ける受けないに関わらず譲ると書かれていた。

俺はこれを受け取るべきか考えていた。

だってお金は欲しいけど、何か金の亡者と思われそう。

しばらく考えた結果、指示を受けたことへの報酬として納得することにした。
それじゃあ暗黒大陸に let's go!

Z月P日

というわけでやってきました暗黒大陸。

エリアーで発生した次元震の影響なのか、大陸への進入を阻んでいた次元の断層がなくなっていた。

突然次元震が発生し、侵入出来なかった大陸に進入できることに出来すぎてると思っ
てしまった。

まあ、細かいことは気にせず、俺はこの大陸を自由に探検することにした。

せっかく来たんだから探検してもバチは当たらないはずだ。

とはいえ、見渡す限りの荒野だなあ……。

ここに一体何があるんだろう？

そんな考えでできた俺はあんなことになるとは思いましなかった。

第7話

Z月Q日

荒野を彷徨っていると変なのに遭遇した。

それは馬みたいな頭をしたロボットと牛みたいな頭をしたロボットだった。

この大陸で初めて接触した住民のため、穏便に済ませたい俺は話し合おうとする。ところが2機のロボットはこちらにガトリングガンと棍棒を向けてきた。

ちよっ！待って待って話し合おう！

そんな俺の思いなど知ったことかと言わんばかりに攻撃してきた。

どうにか回避しながら話し合おうと呼びかけた。

でも、返答は弾丸や棍棒で悲しかったよ。

仕方なく俺はヴァイサーガの装備の1つ、水流爪牙という鉤爪を装着して突貫する。弾丸を紙一重に回避して、水流爪牙で2機の顔目掛けて斬り裂く。

顔の近くにコックピットがあるのか2機は動かなくなった。

そして、中から毛むくじやらの何かが出てきて何処かに逃げ出した。

俺は見たことのない生物に呆然としてみると、2機の機体が爆散したのであった。

あれは一体何だったんだろう？

Z月R日

あの変なロボットの遭遇から1日が経ち、俺はついにこの大陸の原住民を見つけた。流石にヴァイサーガで接触すると、敵だと警戒されかねないのでハロには緊急の呼び出しがあるまで待機してもらおう。

まあ、機体を降りて接触しても敵だと警戒されそうだけど。

とはいえこういうのは最初にできる印象が重要だ。

そのためここは穏やかに行こう。

結果、当然の様に警戒されて現在監視されています。

いや、予想はできてたけど・・・

とりあえずはこのリットナー村という集落の村長であるダヤツカに事情を説明していた。

説明の途中にガンメンという言葉が出てきて聞いてみれば、ガンメンとは俺が昨日遭遇したロボットのことだ。

倒したとは言わず、岩陰から遠目で見たと言っておいた。

説明を終えて問題無いと解放されたが、外の人間ということで村人から怪しまれて

た。

Z月S日

昨日はリットナー村で過ごした。

翌日になると村人は昨日と違い。恐る恐るだが普通に話しかけてくれた。

どうやらダヤツカが俺のことを村人に説明してくれたようだ。

そんな俺は今リーションという男というよりはあの・・・ハッキリ言うとオネエみたいな人に外の世界のことを色々と聞かれた。

別に悪い人ではないんだけど、俺を見る目がなんか怖い。

何故か貞操の危機を感じる・・・！

そんなリーションとそれなりに話すと、今度は赤い髪の少女に声をかけられた。

少女はヨーコといい、このリットナー村一番の狙撃手だそうだ。

しかし、このヨーコはとにかくヤバイ少女だ。

何がヤバイと言うとそれはヨーコの格好だ。

それは上はビキニだけで下はホットパンツのみというなんとも際どい格好だ。

正直目のやり場に困る。

そんなヨーコの用件は食料調達に付き合ってもらったことだった。

一宿一飯の恩もあるため、俺は快く引き受ける。

狩りはヨーコの愛銃である狙撃銃を使った。

どういう原理か知らないが、狩りでは大きな音を出さないために矢を弾丸の代わりに使っていた。

適格に獲物に命中させているのを見ると、試しに撃たせてもらうことになった。

狙撃銃なんて使ったこともないのに、アクセルの体が覚えているのか見事羽がついた狸に命中した。

初めてで命中させたことにヨーコは意外そうにしてたな。

それからは交互に撃ち、たくさんの獲物を村に持ち帰った。

持ち帰ったたくさんの獲物に村の人達は大喜びしてた。

こんなふうに平穏な日常が過ぎた……

ああ、俺はどうしてこんなことをしているんだろう。

村にお世話になって数日が経ち、俺は平穏な日常を過ごしていた。

皆さんそんな俺は今、マシンガンを手を持ちガンメンと戦ってます。

事の発端はこの村にガンメンの部隊が攻め込んだ。

ヨーコは部隊を村から遠ざけるためにガンメンを引きつけると言って飛び出した。

流石に一人では無茶なため、後を追おうとした俺にダヤツカがマシンガンを渡してき
た。

そして、俺はいつの間にかヨーコと一緒にガンメンを引きつけていた。

「ああもう！しつこいわね！」

追ってくる1機ガンメンに狙撃銃を撃ちながらヨーコは悪態をつく。

「言って聞く奴じゃないだろ！」

アクセルも撃ちながら相づちをうつ。

「そんなのわかってるわよ！」

ガンメンに攻撃は当たってはいるが、あまりダメージを与えられていない。

「やはり、硬いな」

マシンガンもあまりダメージを与えることができていない。

ガンメンは隠れて攻撃するアクセル達を叩き潰そうと、棍棒を地面に無闇矢鱈に叩き
つけていた。

「無茶苦茶にやるわね、あいつ」

「だが、あんなの食らえばひとたまりもないな」

そんな時、ガンメンの足下が棍棒を叩きつけた衝撃で崩れ始めた。

「ちよつと待ちなさい！」

ヨーコはガンメンの後を追って穴に飛び込む。

「待てヨーコ！」

すでに穴に飛び込んだため、アクセルの制止の声は届かなかつた。

「はあ、とはいえ今なら問題ないな。ハ口、俺だ。今すぐ来てくれ」

『了解！了解！』

ヴァイサーガが来るまでアクセルはヨーコが飛び降りた穴を覗く。

中ではガンメン相手に小さなガンメンが立ち向かっていた。

「何だあのガンメンは？」

それはアクセルが知るガンメンの中では一際小さい顔面だった。

操縦しているのは少年のようだが、戦いたくないのか怖いのか泣いているようだ。

そんな中アクセルはヨーコが小さいガンメンに同乗しているのを見つけた。

他には赤いサングラスをつけた上半身裸の男も乗っている。

『アクセル！アクセル！』

声の方に振り向くとヴァイサーガが到着したようだ。

マシンガンを近くの岩に立てかけて機体に乗り込む。
「さて、いくぞー！」

ジーハ村に落ちたガンメンは地上に逃げようとするも、小さなガンメンのラガンの追撃されて撃墜された。

地上に出たラガンを操縦した少年シモンとその兄気分であるカミナは初めて見る地上の空に見惚れていた。

そこへ先ほどのガンメンと逸れていた部隊が現れた。

「帰るー！村に帰るー！」

「何してんだシモンー！」

たくさんの数のガンメンに怖気付いたシモンが村に帰ろうとするも、やる気十分のカミナが引き留めていた。

「ちよつと待つて！それよりもアクセルはどこー！」

「アクセル？誰だそりゃ？」

「あたしと一緒にガンメンを引きつけてたやつで、真正正銘の外の世界から来た男よ！」

「へえ？外の世界から来た奴か！」

外の世界という言葉にカミナは好奇心を露わにして笑っていた。

「やいやいやいやい！でけえ顔面して俺達を見下ろしているガンメンども！」

そんなカミナはガンメン相手に啖呵を切ろうとしていた。

そこへカミナ達の前に黒い影が舞い降りた。

「な、何だ!？」

啖呵を切ろうとしたカミナは突然現れた黒い影に驚いていた。

黒い影の正体はヴァイサーガであった。

ヴァイサーガは五大剣を抜くとガンメン達に突きつける。

「おい！てめえせつかく俺が決めようとしてるところで邪魔すんな！」

しかし、カミナはヴァイサーガに啖呵を中断されたことに文句を言っていた。

「ちよつとあんた何やってんのよ！」

「あ、兄貴危ないって！」

「うるせえ！こいつには一言言わねえと気が済まねえんだよ！」

一方のヴァイサーガに乗るアクセルはカミナに気にすることなく、五大剣を構えてガンメン達へと斬りかかる。

ガンメン達は突然現れたヴァイサーガに対し、誰だろうと構わないと言わんばかりに攻撃する。

ヴァイサーガは牛ガンメンの棍棒を五大剣で受け流して斬り裂き、馬ガンメンのガト

リングガンの弾丸を切り払いながら接近して斬りかかる。

そうやって徐々にガンメンの数を減ってきていた。

「輸送機接近中！輸送機接近中！」

「輸送機だと？これは……」

確認してみると接近している輸送艦はこの大陸のものではなく、外の世界の輸送艦だった。

輸送艦からはマジンガーZなどスーパードロイドが発進していた。

「彼らか……ならあとは彼らに任せて問題ないか」

残りの敵を彼らに任せ、ヴァイサーガを急いでこの戦場から離脱したのであった。

第8話

Z月T日

いや、昨日はたいへんだった。

あの後どうしたって？

ヨーコと合流しようかと思っただけど、流石にマジンガー組と顔合わせするのは面倒なことになりそうだから合流は控えた。

何が面倒かだって？

今顔合わせすると後々面倒ごとになりそうな気がする。

それにしてもあのガンメンを操るあの毛むくじやはなんて呼べばいいんだろう？
ふとそんなことを考えながら、遠くからヨーコ達の様子を見ることにした。

Z月U日

それから暗黒大陸調査組とヨーコ達リットナー村の人達はお互いに情報を交換して
良好な関係を築いている。

一方の俺はそんな様子を遠くから見えています。

はあ……それにしてもお腹が空いたなあ。

一応機体の中に少し前に買った非常食があるからそれを食べればいいけど、あの非常食ってなんだか味気ないんだよね。

固いし。パサパサしてるから。

リットナー村でのご飯が恋しい。

リットナー村の料理でなくても普通の料理が恋しい。

そんなふうを考えていると状況が動き出した。

リットナー村へガンメンの部隊が進行していた。

その内の一機はこれまで見たガンメンとは違う感じだった。

兜を付けてて隊長機みたいだなあ。

そんなガンメンの部隊に対し、リットナー村からはマジンガーを含むスーパーロボット隊に一機のサングラスをかけたガンメンが出撃していた。

そのガンメンは前に見た小さいガンメンではなく、破壊したガンメンのパーツを組み上げて作ったものだった。

どんな風に戦うのか俺は様子を見ていたが、そのガンメンは全く動かなかった。

本来ガンメンはあの毛むくじやらが操縦するように設定されているから、人間では操縦できないようにされてるのかな？

しかし、動かないガンメンの後方に数機のガンメンが現れた。

数機のガンメンは動かないガンメンを破壊しようとしたが、あの小さなガンメンが動けないガンメンを守ろうとして攻撃を受けていた。

流星に見過ごすわけにはいかないな。

こつちも動くでしょう。

日記を閉じようとしたが、その手は目の前の光景によって止まってしまった。

何と先程まで動かなかったガンメンが動き出した！

そのガンメンはそのまま兜のガンメンと戦うが、機体の性能差か押されたいた。

そこへまたあの小さいガンメンが助けに入ったが、俺は再び目の前の光景に呆然としてしまった。

サングラスのガンメンは頭部に小さいガンメンを無理矢理突き刺した。

あまりの光景に見ていた全員は呆れてたよ。

だってあきらかに合体できるわけでもないのに。

その時、不思議なことが起こった！

ただ頭部に刺さっていた小さなガンメンが輝きだすと、サングラスのガンメンがこれまで食らっていたダメージを修復し、文字通り合体し始めたのである。

そして、2つの機体は1つの機体へと合体して変化したのだ。

どんな展開だよと思うと同時に凄いとしか言いようがなかった。

その後は兜の機体から兜を奪い取り、圧倒的な力で兜のガンメンを撃退した。残ったガンメンはマジンガー達により撃破され、この戦闘はあの合体した機体のえつと・・・確か、そうそうグレンラガン達が勝利を収めた。

ちなみに名前はパイロットの声からしてあの上半身裸の男がそう言っていたのが聞こえた。

堂々と啖呵切ってたなあ

それしてもどうしてグレンラガンなんだろう？

頭のガンメンはグレンで下の胴体がラガンなのかな？

そんなことを考えながら今日の日記を書き終えた。

乙月V日

俺はあれから暗黒大陸を離脱して、今は中華連邦のカフェでゆっくりしています。

いやーやっぱりお金は大切だね。

お金が無いところやってコーヒー一杯も頼むことが出来ないからね。

コーヒーを飲んでゆっくりするのが最高だよ。

こんな平穏がいつまでも続くと嬉しいな。

そう思っているとカフェのテレビにエリアーのフジ基地がWLFというテロリス

トと、日本解放戦線という反ブリタニア組織に占拠されたことが報じられていた。

人質をとって交渉しようとしているけど、あんなやり方ではむしろ反感を買うだけなのに。

テレビを見て状況を静観していると、仮面を被った謎の人物であるゼロが現れた。

ゼロはそのままテロリストに受け入れられて中に入った。

正直ゼロは彼等と手を組むとは考えられなかった。

だって人質をとるようなやり方をする彼等と手を組んでも上手くいかない気がするから。

そうしてしばらく時間が経つと、基地内に見たことのない紅いKMFとATに黒に塗装されたKMFが現れた。

人質はゼロ達によって解放されたところに、隙を窺って潜んでいた白いKMFが現れた。

その上、国連の特殊部隊として編成された部隊が現れた。

その部隊にはソレスタルビーイングの空中戦艦に、確かこの世界に転移してきたえつと：・：そうそうフロンティア船団とかの戦艦に暗黒大陸で見たグレンラガンにスーパーロボット隊が編成されていた。

こりやテロリストに勝ち目ないよ。

この戦力でどう勝って言うんだよ。

そうして戦闘の結果は言わずもがな、WLFはゼロ率いる黒の騎士団と国連の特殊部隊によって撃破されました。

それにしても、ゼロはどうやって人質を解放させたんだろう？

テロリストにとって人質は自分達の生命線だからそう簡単に渡すと思えないけど。

とはいえ考えても仕方ないため、冷めたコーヒーを飲み終え俺はカフェを出た。

第9話

Z月W日

人生において金はいくらあっても良いものだ。

というわけで俺は今リモネシア共和国という国で映画撮影の雑用のアルバイトに励んでいます。

どうやら国連に新しく加盟したフロンティア船団との国際交流で、このリモネシアのマイヤ島で映画の撮影を行うことになったのだ。

当然そういった撮影には人手が必要であり、募集が出たのを見た俺はすぐに応募しました。

そうして俺は現在働いていたが、まさか彼等と遭遇するとは夢にも思わなかったよ。それは最近噂になっている国連の特殊部隊ZEXISの面々だ。

とは言ってもソレスタルビーイングや黒の騎士団などがないことから、彼らは表で動く部隊だろう。

まあ、そんな彼等も映画撮影の雑用に動いているが、俺としてはなるべく関わらないようにしよう。

しかし、そういうわけにもいかなくなってしまった。

「全く、どうしていつもこうなる……」

マイヤ島に突然耳鳴りのような音が聞こえたと思ったら次元震が発生し、その上次元獣も現れた。

今はZEXISが戦っているが、いつ戦闘の余波がこちらにくるかわからない。

「アクセル！ アクセル！」

近くの小島に隠しておいたヴァイサーガが到着し、急いで機体に取り込んだ。

「邪魔だ！ 水流爪牙！」

鉤爪を装着すると次元獣へと飛びかかる。

周りのZEXISの機体は突然現れたヴァイサーガに驚いているが、アクセルは気せず次元獣を攻撃する。

するとヴァイサーガに向かってエリアーのアツギで戦った白い次元獣が攻撃してきた。

「またお前か！ しつこい！」

この機体なのかアクセルのどちらかに恨みがあるか分からないが、アクセルにとっては鬱陶しかった。

「また来るんだっいたら今度こそ叩つ斬る！」

水流爪牙を外し、五大剣を抜いて斬りかかろうとすると銀色の機体が割り込んできた。

「すまねえがこいつは俺の獲物だ」

銀色の機体ブラスタからの通信にアクセルは何も言わず、周りの次元獣へと攻撃を開始する。

「へへっ、譲ってくれてありがとよ」

「(こつちとしてはあいつどうにかしてくれるなら問題ないからいつか)」

しかし、次元境界線が歪曲し次元震が再び発生すると、今度は次元獣ではなく全身に赤い結晶体を纏ったような物体が現れた。

「何だあれは？」

見たことのない物体はブラスタへと高速で接近すると、ブラスタを狙って攻撃し出した。

ブラスタは結晶体の物体を攻撃をギリギリ回避し、結晶体の物体は今度はヴァイサーガへと攻撃し出した。

「貴方にも初めましてと言っておきましょう」

「……………」

結晶体の機体からの通信にアクセルは何も喋らない。

知らない人に話しかけられた時の鉄則、それは無視しなければいけないことだ。

「おや？だんまりですか？それなら」

機体の表面の赤い結晶体から結晶体の蔓が伸びてくると、ホーミングレーザーへと変化するとヴァイサーが目掛けて伸びてきた。

「（これは避けたほうが、よさそうだ！）」

ホーミングレーザーをギリギリ回避するも、尚も伸びてくるため近くにいた次元獣を盾にした。

ホーミングレーザーが次元獣に突き刺さると、再び結晶体となって次元獣を引き裂いた。

「うへえ・・・回避しといてよかった」

回避しといて良かったと安堵する。

「今度はこちらからいくぞ！」

ヴァイサーは結晶体の機体へ接近する。

結晶体の機体は先程と同じように結晶体の蔓を伸ばすと、ホーミングレーザーに変化させて攻撃してくる。

「おのー！」

スピードを落とさずギリギリで回避すると、結晶体の機体を五大剣で斬り裂く。

「この感覚は……!?!」

確かに結晶体の機体を斬ったが手応えがあまり感じられなかった。

「機体の能力か?それとも別の何か?」

考えるも見当がつかなかった。

「なるほど。さすがはシャドウミラーですね」

「!?!何故その名を!」

男の言葉をアクセルは聞き逃すことは出来なかった。

「おや?今度は返事をしてくれましたか。ですが今回はここまでです。またお会いしましょう」

結晶体の機体は後退して戦域を離脱し始めた。

「逃すか!」

アクセルは追おうとするも、まるで結晶体の機体を守るかのように次元獣が立ち回ってきた。

「邪魔だ!」

次元獣を二太刀で撃破するも、結晶体の機体の姿は無く逃げられてしまった。

「くそ!ハロ、あの機体のデータは記録したか?」

「記録シタ！記録シタ！」

とりあえずデータは記録されているから、今度調べてみるべきだろう。

「こちらでも後退しよう」

ZEXISの方も紫色の戦闘機の援護もあつて、次元獣を撃破しており残った敵もあと少しであつた。

下手に関わらないうちにアクセルはこの戦域を離脱した。

乙月X日

昨日は散々だった。

アルバイト中に次元獣が現れるわ、俺の事を知ってる怪しい奴が出るわ大変だった。

あの後、映画の撮影は再開されることになった。

それにしてもあれは驚いたな。

マオ役のランカちゃんって可愛い女の子と、工藤シン役の早乙女アルトってイケメンのキスシーンの話を聞いてびっくりしたよ。

やっぱり映画だとキスシーンって外せないのかな？

まあ、俺には関係ないため雑用に励んでたけど。

Z月Y日

いやー頑張つて働いた分、バイト代をがっぽりと頂いたよ。

とりあえずこのお金は貯金するとして、俺は今ヴァイサーガのコックピットの中であの結晶体の機体について調べていた。

乗っていたパイロットの男。

あの男ははつきりとシャドウミラーと言っていた。

平行世界の地球連邦軍の特殊任務部隊、通称「シャドウミラー」。

アクセルはこの部隊の特殊処理班の隊長を務めていた。

何故あの男がシャドウミラーについて知っていたのかわからない。

アクセルと同じ世界の間人なのか？

それとも何らかの方法でシャドウミラーについて知ったのか？

いくら考えて見当はつかず、堂々巡りになってしまいそうだ。

ハロが乗っていた機体も調べてみたが、どの軍の機体の技術が使われていないそう
だ。

独自の技術で開発されたい機体だそうだ。

はあくそれにしても何でこんなことになるのかな？

俺はただ平穩に過ごしただけなのに。

こういう時はフロンティア船団で有名な銀河の妖精シエリル・ノームの歌を聴こう。ちよつとハロに頑張ってもらったお陰で、シエリルの歌の動画を購入することができた。

それにしてもいい歌だな。

CDが出たら絶対に買おう。

そう思いながらゆっくり過ぎすのであった。

第10話

「何でこうなった・・・」

拝啓、皆様元気ですか？

私ですか？私は元気です。

今何をしてるかって？私は・・・

私は今たかさんのMSに追われています。

「どうしてかなー!」

アクセルはいつも通りヴァイサーガで移動していた時に、何故か移動経路を知っていたかのようにMS部隊が現れたのだ。

現れたMS部隊は3つのグループに分かれていた。

1つはティエレンを主力として編成された部隊。

次にAEUヘリオンやリーオーやエアリーズなどで編成された部隊。

最後はサザーランドにユニオンフラッグで編成された部隊。

皆さんはもう気付いているでしょう。

「何で三大国家が待ち伏せしてるんだよ!」

そう待ち伏せしていたのは三大国家である人革命連、A E U、ブリタニア・ユニオンだった。

「そりゃあ狙う理由はわかるけど・・・」

このヴァイサーガはこちらの世界にはない技術で開発された機体だ。

強い力を欲する国からしたら喉から手が出るほど欲しいはずだ。

「だけど・・・どうして俺の移動経路がわかったんだ？」

アクセルはどうやって移動経路を特定したことへの疑問が生まれた。

哨戒部隊に見つかってしまったということなら納得できるが、三国家がここまで足並み揃えて待ち伏せするのは普通ではない。

「誰かが移動経路を教えたのか？」

攻撃を回避しながらアクセルは1つの答えが思い浮かんだ。

「一体誰が・・・あ!？」

その時アクセルは2人の人物を思い浮かべた。

1人はボートマン、もう1人はマイヤ島で現れた結晶体の機体のパイロット。

この2人が怪しいとアクセルは考えていた。

ボートマンはメールなど初めて接触してきた人物だ。

もう1人はアクセルの事を知っているようなことを言ってきた結晶体の機体のパイ

ロツト。

「くそー！やられたら分は絶対に倍にして返してやるー！」
とはいえまずは逃げ切らなければいけない。

Z月Z日

つ、疲れたあー。

どうにか逃げ切ることができた。

とりあえず敵部隊の中に入って動き回ったよ。

そのおかげで入られた部隊は味方に攻撃するわけにいかないけど、他の部隊はバンバン撃ってたなあ・・・

そのせいで入られた部隊のMSは撃ち落とされていたよ、仲悪いなあ・・・

それを繰り返して疲弊したところを全力で逃走しました！

とはいえ本当に疲れたよ

はあ・・・どうしてこうなるんだよ・・・

もう今日は寝よう！

うん、そうしよう！

Y月A日

俺が三大国家に追われてた頃、どうやらZEXISも俺と同じように三大国家と戦っていたようだ。

どうして知っているかって？

三大国家とZEXISの戦闘していたって言うニュースが流れてたからだよ。

あつちも大変だなと思っていると、ポートマンからメールが来た。

内容はリモネシアに向かって欲しいと書かれていた。

この時俺の勘が告げていた。

絶対に近づくな！近づいてもいいことはない！と告げていた。

だって向かって欲しいことは面倒ごとでしょ？

そんなの絶対に良いことじゃないでしょ！

とりあえず断る旨を返信しておいた。

さうして今日は近くの街で休むぞう！

Y月B日

いやーやつぱりベッドで寝るのがって最高！

ふかふかして気持ちよかつたう！

暇だったので街を歩いてみると、日本のお土産屋があった。外国で日本のお土産屋は珍しく中に入ってみた。

店主は日本人で日本のことを知って欲しくて開いたそうだ。

頑張ってるなあと思って商品見ていたら、般若の面が目に入った。

なんとなく気になったのでお面を買い、街をぶらぶらしていた。

買ったお面はどうしようかと思っていたら、もし主人公達と会った時に顔を隠すのに使えると閃いた。

となると後は服だな。

アクセルの格好でお面つけてもバレそうなので、古着屋で黒のロングコートを買った。

お面をつけてコートを着て鏡を見る。

・・・うん、見事に怪しい人が完成しました。

とはいえバレないなら問題ないのでこれでよしとした。

ああ、今日は平穩に過ごせた。

Y月C日

リモネシアで時空震動が発生した。

何故時空震動が発生したのかは分からない。

その上、新帝国インペリウムの王であるガイオウは世界に対して宣戦布告し出した。冗談じゃないよと思ったよ。

ガイオウは次元獣を操ることが出来るようで、俺は関わりたくねえと思った。絶対に進行ルートに鉢合わせにしないと俺は心に決めた。

「今のところ敵影はなし、か」

いつも通りヴァイサーガで移動していたアクセルは、今の世界がとんでもない事になったと実感した。

インペリウムが進む先では必ず戦いが起きていた。

ガイオウの強大な力に人々は恐れ、屈する者が続出するほどだ。

「絶対に関わりたくないな」

もし出会ってしまえば、否応なく戦いなるだろうというか絶対になる。

「機影確認！機影確認！」

ハロの言葉に移動を停止すると、周囲を確認する。

「ハロ、機影は何処だ？」

「右方向！右方向！」

右方向を確認すると、ハロの言う通り機影を確認した。

「あれは・・・ガンダムにスーパーロボットか？」

見てみるとそこには様々なガンダムにスーパーロボットがいた。

「ん？あの編成、どこかで・・・ああ！Zのやつだ！」

アクセルはあの場にいる機体が友人のお勧めされたスパロボ作品の1つ、スーパーロボット大戦Zに登場する機体だということを思い出した。

「どうして彼らが？・・・もしやあの時空震動か？」

思い当たることと言えばリモネシアの時空震動以外思い当たらなかった。

「とりあえず隠れとこ」

機体の姿勢を低くしてなるべく見つからないようにする。

様子を見るとこれからの行動を考えているようだ。

そこへAEUのMS部隊が現れた。

「十中八九彼らを自軍に取り込むつもりだな」

彼らを取り込むことが出来たら、AEU軍は強力な戦力を手に入れることはできるだろう。

彼らがついていくかは別だが。

案の定、ZETH部隊は拒否するとAEU部隊は発砲し出した。

「短気だなあ……」

こういつた交渉は地道に行うものであるとアクセルは考えていた。

「まあ、彼等なら大丈夫でしょ」

加勢せず静観していると、A E U部隊に向けて別方向から攻撃がきた。

A E U部隊は不意打ちに対して、抵抗せず情けなく後退した。

そして、今度は見たことのないロボット軍団が現れた。

「何だあれは……?」

ロボット軍団を指揮していると思われる人物と言つていいかわからない人物がいた。

それは半分が女の顔で、もう半分が男の顔だった。

誰から見てもおかしいと思うだろう。

その男?にアクセルは見覚えがあつた。

「確か……あしゆらだっけ?」

その見覚えのある人物?はあしゆら男爵と言つて世界背服を企むD r. ヘルの腹心らしい。

目的は先ほどのA E U部隊同様、彼等の戦力を取り込むことだった。

「これも大丈夫だろ」

とはいえこれも加勢せず静観することにする。

「おおーやっぱり強いな」

戦いはZETH部隊があしゆら軍団を圧倒し、援軍として現れたロボットが加勢したことよってさらに圧倒していた。

「これは何もしなくても大丈夫そうだな」

自分が戦うことがないことに安堵していると、今度は次元獣が現れた。

次元獣には白い次元獣と似ている次元獣がいるも、ZETH部隊に突進するも2機のガンダム連携攻撃にくらい、とどめにもう1機のガンダムの攻撃で撃破されてしまった。

「すごい連携だなあ〜」

そして、ZEIXISも援軍として現れ、敵の数も少なくなつてアクセルは出番はないと確信していた。

あんな事が起きるまでは。

あしゆら軍団のロボットの1機が誰かの攻撃か分からないが、吹き飛ばされてヴァイサーガの方へと飛んできた。

「やばっ!」

咄嗟に吹き飛んできた機体を五大剣で斬ってしまった。

「あ……!」

この行動のせいで隠れていたことがバレってしまった。

「急いで逃げよー！」

嫌な予感がするアクセルは急いで離脱しようとするも、時すでに遅し。

高機動型のガンダムやバルキリーに囲まれてしまった。

「すまないが同行してもらおうぜ」

「(さ、最悪だー！)」

戦況はすでに次元獣は撃破されて、あしゆら軍団も後退していた。

何かを囿にして逃げる事は不可能だった。

アクセルは仕方なく同行することになってしまった。

第11話

「どうしよう・・・本当にどうしよう・・・」

ヴァイサーガのコックピットの中でアクセルは焦っていた。

咄嗟に吹き飛んできたロボットを斬ったせいで隠れていたことがバレてしまい、逃げようにも囲まれてしまった。

そのせいで現在はZEXISと同行するになっちゃってしまった。

「このまま中に籠るか？いやでも無理やり開けられるかもしれない。けどどうすれば・・・そうだ！」

アクセルはある物を取り出す。

それは以前何となく買ったお面と黒コートだった。

「これで顔を隠そう」

早速お面をつけてコートを羽織る。

「はーふう・・・よし！いくぞー！」

コックピットを開けると、機体の足元にはZEXISのメンバーが集まっていた。

「ハロ、俺が戻るまで機体を頼むぞ」

小声でハロに機体を任せることを伝える。

「了解！了解！」

ハロも合わせてくれたのか、小声で返事してきた。

機体から降りるて周りを見る。

集まっているメンバーの中には面識のあるカレンやヨーコがいた。

他にはAPで見覚えのあるキャラや似ているキャラもいた。

例えば、兜甲児とか流竜馬とか。

謎の機体のパイロットは般若の面をつけた怪しい人物ということで、周囲のメンバーはさらに警戒心を高めていた。

「こちらの要望に従ってもらい感謝します。私はマクロスオーターの艦長を務めているジェフリー・ワイルダーです。こちらは……」

「プトレマイオスの艦長、スメラギ・李・ノリエガです」

「これは御丁寧に、私のことは……名無し、とでもお呼びください」

歴戦の指揮官を思わせる艦長と美人の艦長の挨拶に、アクセルも本名は名乗らず丁寧に挨拶し返す。

「名無し、ですか？」

「ええ。本名を名乗らず失礼かと思われませんが、どうかご容赦を」

本名なんか名乗ったら面倒なことになると予感したアクセルは、偽名が思いつかなかったので名無しと名乗ることにした。

「……わかりました。では最初に、貴方は何者ですか？」

「私が何者かですか。私は、ただ平穩を求めらる者です」

アクセルの答えにスメラギは意外だという表情をしていた。

「正直そのような答えが来るとは意外でした」

「ふふふ、下らぬ野心は己の身を滅ぼしかねないものですからね」

平靜に話しているが、内心では早く話を終わって欲しいと思っていた。

「確かにそのお考えは一理ありますね。それでは次に、あの機体について教えて貰えますか？」

次はヴァイサーガのことを聞いてきた。

「申し訳ありませんが、これについての質問は黙秘させていただきます」

当然答える気はない。

「そうですか。では最後に、貴方は私達の敵ですか？」

最後の質問にアクセルは冷静に考える。

返答によっては彼らが敵か味方のどちらかに変わるだろう。

「私は……どちらでもありません」

「それは、どういうことでしょうか？」

「そのままの意味です。私が戦う時は降りかかる火の粉を払うだけ、それ以外はただ平穩に過ごすことが私の望みです」

嘘偽りなく本心を話すと、周りのメンバーは信じられないという表情をしていた。

おいこらどういふことだその表情。

こんな怪しそう格好してるけど、俺は平穩に過ごしたいんだよ。

「そ、そうなの。．．わかりました、貴方が私達の敵ではないならこちらも貴方と敵対することは一切ありません」

驚きながらもスメラギはアクセルが敵ではないと理解してくれたようだ。

その後もスメラギから質問されたが、答える質問には答え答えられない質問は黙秘していた。

そうしてアクセルは話が終わると颯爽と機体に戻ると、急いでZEXISから離脱するのであった。

第12話

Y月D日

あああゝやっちゃまったよゝ！

俺はコックピットで1人頭を抱えて嘆いていた。

何故頭を抱えて嘆いていただつて？

理由はZEXISの会談が原因だ。

ぶっちゃけてしまうと、会談での自分のカツコつけたような喋り方が物凄く恥ずかしかつた。

何だよ私はとか、ふふふとかつて、今でも思い出すと凄く恥ずかしい。

何処の厨二病の奴だよと言われてもおかしくない。

俺はそんな恥ずかしさにコックピットの中で悶えていたのであつた。

Y月E日

インペリウムは現在AEU領内にあるサンクキングダムという国に向かつていた。

そこはかつてヒイロ・ユイという完全平和主義を唱えていた思想から、同じように完

全平和主義を唱えた国だ。

俺としてもその思想は素晴らしいと思った。

だが、世界の私利私欲によってサンクキングダムという国は無くなってしまった。インペリウムは見せしめのつもりかわからないが、この国に向かつているようだ。

そんな状況に対してA E Uの政治家達のとった手段は、無視することだった。

この手段に俺は腐ってるわ〜と思つたよ。

だつて敵を領内で好き勝手させといて、お隣さんに注意を向けるつてどうなの？

そりや遠くから来たマフィアより近くの暴走族が気になるつて気持ちには分からなくもないけど。

まあ、何もしない俺が言うのもどうなんだろうなあ。

そんな風に思いながら俺は静観するだけだった。

Y月F日

サンクキングダムに向かつてたインペリウムはZ E X I Sによって退けられた。

やっぱり主人公つて凄いな。

アクセルも主人公だけど、中身が臆病者の俺は正直戦おうつて勇気が出ないよ。

それにしてもどんだん強くなってるよなあ。

もし、彼等と戦うなんて事態になったら勝てるとは思えないな。

というか戦いたくないけど。

そんな俺にある人物から連絡がきた。

『こうやって話すのは初めてだね。ここは初めましてと言っておこう』

そうやって話す人物は変声機を使っているのか男か女なのかわからなかった。

『私の名前はポートマン。無論、偽名だがね。君のことは何て呼べばいいかな?』

ポートマン、アクセルがこの世界で初めて連絡してきた人物。

この人物が三大国家に自分の情報を教えたと思われる人物の一人だ。

「名無し、とても呼んでもらおうか」

『さて、それでわざわざ君に通信した理由だが・・・ミスター名無し、ZEXISへの協力を要請したい』

「何?」

ZEXISの協力という言葉にアクセルは理解できなかった。

『もし、君が協力してくれるなら見返りとして物資に拠点を留意しよう』

「.....」

ポートマンの提案にアクセルはどうすべきか考え出す。

もし、この提案を受け入れれば物資やアクセルだけの拠点が手に入る。

物資だけでなく拠点となれば、平穩に過ごしたいアクセルにとって喉から手が出るほど欲しい。

しかし、ZEXISと協力することは戦火の渦中に飛び込むようなものでもある。

それに協力するならば彼等と共に行動する可能性も大きくあるため、そう簡単に了承するからことは出来ない。

『どうかね、ミスター名無し』

「………一つ、聞きたいことがある」

『何だね?』

「こちらは少し前に三大国家に待ち伏せされたことは知っているか?」

『ああ、知っているとも。君は私が三大国家に情報を教えたと考えているのかい?』

「この世界で俺に初めて連絡してきたのはボートマン、お前だけだ。疑うなど言われても信じられるとは思えないが」

『……確かに君と連絡していたのは私だけだ。私なら君の情報を三大国家に教えることもできるだろう』

「………」

『だが、誓って君の情報を教えてない。どうか信じてもらえないだろうか?』

ボートマンの言葉にアクセルはどう判断すべきか迷っていた。

本当に情報を教えてないのか、それともこの場を凌ぐ為の嘘なのか。

「(本当にどうしよう?)」

ボートマン、この世界でメールだけで連絡していた人物が直接連絡してきた。

協力を要請するならメールでも出来た筈なのに。

まあ、アクセルがメールを無視するから直接連絡したかもしれないけど。

「……一つ、条件がある」

『何だろうか?』

「ZEXISに協力するのは構わない。だが、共に行動する気はない。これは構わないな?」

『……わかった。それで構わない』

内心でよし!と思いつつながらアクセルは話を続ける。

「最後に俺は好きに動く、それでいいか?」

『好きに動くとはどういうことかな?』

「俺は自分のやりたいように動くだけだ。その時、偶然ZEXISと遭遇したら彼等に協力するということだ」

『なるほど……』

「これが俺がお前の提案を受ける条件だ」

『・・・・・・・・』

今度はボートマンが考えだす。

アクセルの条件を受け入れるべきか、それとも受け入れず提案を下げるのか。どう判断すべきか考えているようだ。

『・・・・・・・・いいだろう。君の条件を飲もう』

「そうか」

『ただ、こちらも一つ条件がある』

「何だ？」

『こちらが指示を出した時はその指示通りに動いて欲しい』

「わかった、その条件を呑もう」

「ここでこねたら面倒なことになりそうなので、アクセルはここは条件を呑むことにした。」

『早速だがミスター名無し、ここに向かって欲しい』

こうして提案を受け入れたアクセルは、早速ボートマンから指定された座標に向かうのであった。

第13話

ボートマンの提案を受け入れたアクセルは指示されたポイントに向かっていった。

「このポイントってブリタニア・ユニオンの領内じゃん」

エリアーでブリタニア・ユニオン軍相手に派手に暴れたおかげでアクセルは指名手配された。

その国の領土に潜入しないといけないため、影から影へ移動するかのようにして指定されたポイントに向かってる。

「でも、これが終われば拠点が入る」

これまで常に何処かへ移動して生活してきた。

だが、拠点が手に入ればアクセルはようやく一息つくことができる。

「そうすれば……ボートマンの指示がないとき以外は拠点でゆっくり過ごせばいいな」
これこそアクセルがボートマンの提案を受け入れた理由だった。

好きに動くと言ったが、本当は外にあまり出ることなく引き籠る気満々なのであった。

「ポイント二接近中！ポイント二接近中！」

ハ口の声にアクセルは気を引き締める。

一体何があるかわからないため、油断せずに接近していく。

「またこれか・・・」

そうしてアクセルが見たのは、見たことのない白い機体に白い次元獣とよく見る黒色の次元獣だった。

そんな次元獣達相手にアクシオがたった一機で戦っていた。

「げ・・・やっぱり来たよ」

例の如く、こちらに気づいた白い次元獣はヴァイサーガへと突撃してきた。

「ここいら決着をつけるとするか」

毎度毎度狙ってくる白い次元獣が鬱陶しかったアクセルは、今日ここで白い次元獣を倒す気でいた。

しかし、ここで予想外の事態が発生した。

何と白い機体が白い次元獣の前に出て、ヴァイサーガへと攻撃を仕掛けてきた。

「ちっ！面倒だな！」

白い機体は回転する2基のスピナーで切り掛かってくる。

ヴァイサーガはこれをギリギリで回避するも、今度は白い次元獣が突進してくる。

「(これは避けきれいな・・・なら!)」

五大剣で角を受け止めて、少しずつ突進の勢いを止めていく。

「次はこつちからだ！」

白い次元獣を押し出すと、ヴァイサーガは距離を取る。

「狂風がお前を斬り裂く……！」

ヴァイサーガが五大剣を一閃すると、竜巻の如く渦を巻く衝撃波が発生した。

「いくぞ……！」

渦を巻く衝撃波を白い次元獣へと飛ばす。

衝撃波が命中した白い次元獣は、渦を巻く衝撃波によって動きを封じられた。

「風刃閃！」

動きを封じられた白い次元獣へ五大剣を突き刺そうと、ヴァイサーガは五大剣を構えて突貫する。

「させない……！」

そこへ白い機体が白い次元獣を守るために前に出てきた。

「邪魔だ！」

そのまま突貫するも白い機体は2基のスピナーを回転させて防御する。

五大剣とスピナーがぶつかり合い、両者は大きく吹き飛んだ。

白い機体に邪魔されたせいで、白い次元獣は渦巻く衝撃波から抜け出していた。

「どうしたもんかな?」

白い次元獣を倒そうとしても、白い機体が邪魔してくる。

白い機体を攻撃しても、おそらく白い次元獣が横から攻撃してくるだろう。

どう攻めるべきか考えていたら、他の次元獣と戦っていたアクシオが何処かに移動し始めた。

見ると街から少し離れた施設から、ブラスタが発進してきた。

「なるほど。だからここに行けと指示したのか」

ボートマンが何故ここに向かうよう指示したのか分からなかったが、ブラスタを見てその理由がわかった。

おそらくブラスタの修理が改良が終わる間、敵が来ても守るために送ったのだろう。アクシオはブラスタに近づくが、何か揉めているのか話しているようだ。

「いや何してんだよ」

戦いの真つ最中に揉め始めたことにアクセルは呆れていた。

当然敵もこの隙を見逃すはずがないと思っていた。

「早く本来の機体に乗れ、クロウ・ブルースト」

何と白い機体のパイロットはわざわざ乗り換えるよう言ってきた。

「変わった奴もいるもんだ」

アクセルとしてもクロウが本来の機体に乗り換えてもらえたら、守る必要がなくなるので嬉しいことこの上ない。

しかい、それを見過ごささない奴が現れた。

「そんなことをされては困るのですよ」

現れたのは見覚えのある結晶体の機体、アリエティスだった。

「アイム・ライアード……」

アイムは白い機体パールネイルのパイロットであるマルグリット・ピステールが、任務を遂行できるか監視していたようだ。

「マルグリット・ピステール、貴女の矜持や誇りには何の意味もない不要なものです。貴女はただその男の生命を奪うことだけを考えなさい」

「そのの姐さんに俺を狙わせるように仕向けたのはお前のようだな。自分は手を出さずに高みの見物気取りか？」

「挑発しても無駄ですよ。それに私にとって貴方は殺す価値などないのです。それに……」

何か言おうとしたアイムは斬りかかってきたヴァイサーガによって、続きは中断されてしまった。

「おやおや、まさか貴方と会えるとは思いませんでしょ」

「貴様はここで斬る」

アクセルはアイムが余計なことを喋らないうちに、ここで倒そうすべきだと考えていた。

「随分とせっかちですね」

ヴァイサーガの攻撃を回避しながらも、アイムは余裕の態度を崩さないでいた。

「貴様には聞きたいことがある」

「ほう？ 私に聞きたいことは何でしょうか？」

「以前、三大国家に待ち伏せされたが、あれは貴様の仕向けたことか？」

「ふふふ、その事ですか。ええ、それは私がやりました」

「そうか。それだけで十分だ」

「ですがそれは私の意思ではないのです。ある人物に命令されました」

「.....」

「おや？ 知りたくないのですか？」

「貴様の戯言はもう聞き飽きた」

原因がアイムだとわかれば、アクセルにとってアイムにけじめをつけさせれば問題はない。

そこへ思いがけないことが起きた。

ブラスタに乗り換えたクロウがアームに攻撃しようとしたとき、ブラスタが発進した施設から4基の円盤が射出された。

ブラスタの攻撃は割り込んだパールネイルに命中したが、ブラスタと4基の円盤の連携攻撃はこれまでとは何か違うようにアクセルは感じていた。

「ZEXIS接近中！ZEXIS接近中！」

ハロの声にリーダーを確認すると、確かにZEXISの戦艦が近づいてきていた。

「(ハロ)は引くべきか」

ZEXISに協力するとは言ったが、彼等と共に行動する気はなかった。

それにクロウを守ったことでポートマン義理は果たしたと思う。

そのため、アームをここで倒したいアクセルであったが、ここは後退するのであった。

第14話

Y月F日

昨日はブラスタと円盤の連携攻撃は凄かったな。

これまで見た戦闘ではあんなの無かったのに、それをぶつつけ本番で使いこなすとか。

やっぱり主人公は凄いな。

とはいえ、アイムはあそこで仕留めときたかったな。

でも、下手にあそこに留まって前みたいZEXISに囲まれるわけにはいかないしな。

過ぎたことを愚痴愚痴言っても仕方ないし、今はマイホームとなる拠点のことを考えよう。

Y月G日

ポートマンから用意された拠点の座標が送られてきた。

俺はその座標へ向かうと、そこは中東にある廃棄された鉱山だった。

少し中を調べてみると、何と内部が改造された鉱山基地だった。

おそらくテロリストか何処かの軍が用意したのだろう。

何らかの理由で廃棄されたこの基地をボートマンが見つけて用意したのだろう。

俺はこの基地を用意したボートマンに手際の良さに開いた口が塞がらなかったよ。

とはいえ、長く廃棄されていたせいも埃が酷かった。

しばらくは掃除の日々だな。

Y月H日

掃除をしようと思ったけど、とんでもないことが発覚した。

それは……掃除用具がなかった！

というわけで俺は近くの街に行き、掃除用具に日用品とついでに家具を買うことにした。

ヴァイサーガで街の近くに移動すると機体を降りて、バレないようにちゃんと偽装する。

そうして街に入った俺はまず一台のトラックを購入することにした。

流石に買ってからヴァイサーガのところに戻って置いてまた戻るのは大変だからな。

お金に関してはボートマンから貰った金がたんまりあるので問題はない。

それから掃除用具を先に購入し、そのあと必要な日用品や家具を購入していった。

購入した物をトラックの荷台に乗せ終えた俺にある物が目にとまる。

目にとまったものはシエリル・ノームのCDだった。

今も店頭で曲が流されており、俺は勢いでCDを買った。

そのうえ、高性能CDプレーヤーも購入してしまったが、後悔なんかしていないしね。シエリルの歌を聞きたかったしね！

その分購入したこともあつて、お金も殆ど無くなつてしまった

というわけで今日はもう帰ろう。

トラックでヴァイサーガを隠した場所に戻り、機体に乗り込んでいつも通り起動する。

そして、荷台にある荷物を落とさないようにトラックを慎重に持ち上げる。

せつかく買った家具とか落として壊したら辛いからね。

帰ったら掃除を始めるか。

「はあ・・・」

「随分と暗い溜息だなクロウ」

エルガン・ローディックに指定されて場所で溜息を吐くクロウに、仲間であるロックオンや青山達が声をかけてきた。

「借金が倍になったんだ。溜息でも吐きたくなるぜ」

「まあ……愁傷様だな」

ブラスタの開発元であるスコート・ラボを襲撃したインペリウムを撃退したクロウに、所長であるトライアは新たな借金があることを通告してきた。

ブラスタの修理と改良して出来た借金の額は199万G。

仲間であるZEIXISのメンバーや新しく仲間になったZETHのメンバーは、この額にクロウ同様に言葉が出なかった。

「そういえば彼奴がきてたんだって?」

「彼奴?」

「名無しのことだよ」

ロックオンはとりあえず借金の話題から名無しことアクセルの話題に変えた。

「ああ。正直、あの時は猫の手も借りたい状況だったから助かったぜ」

実際他の次元獣はともかく、白い次元獣 モビータック MDやパールネイル相手にアクシオでは歯が立たなかつただろう。

そんな時、以前会談で名無しと名乗った男が現れた。

名無しは何も言わずMDとパールネイルとの戦闘を始めた。

他の次元獣と戦闘していたクロウは、MDとパールネイルの2体を相手に戦う名無しを見た。

名無しは2対1ということもあって多少苦戦するも、問題なく戦える實力を持つていた。

「確か・・・名無しを最初に見たのはエリアーだったけ？」

「そうね。あの時はいきなり現れてびっくりしたわね」

カレンもヴァイサーガが現れた時のことを思い出していた。

「次はアツギ基地だったな。あれには本当に驚かされたぜ」

ロックオンが思い出すのは自分の狙撃を切り払った瞬間だった。

自分の狙撃コースを何らかの方法で先読みし、あまつさえその狙撃を切り払ったのだ。

「その次が暗黒大陸だったな」

「そうね。あの時は大量のガンメンで困っていたのに、目の前に現れた時はびっくりしたわよ」

ヨーコもその時のこと思い出していた。

「まあ、そんな相手に文句を言う奴がいたけどね」

その言葉に皆はカミナを見る。

「何だよ？俺が獣人共に名乗ってる時に、あの野郎が邪魔してきたんだよ」

敵か味方か分からない相手に文句を言うカミナに、まあカミナらしいと思っていた。

「まあ、操縦してるやつはよくわかんない奴だったな」

Z E U T H組が合流することになった際、名無しの機体を囲んで無理矢理だが同行してもらった。

その時に降りてきたパイロットは般若のお面に黒コートを羽織るなんとも怪しい人物だった。

「正直あの男は平穩に過ごしたいと言っていたが胡散臭そうだったな」

会谈で名無しは自身の目的が、ただ平穩に過ごしたいと述べた。

しかし、Z E X I Sのメンバーは胡散臭すぎてあまり信じてなかった。

「結局のところ、今の所は味方と考えるべきなのかね」

謎に包まれた人物、名無し。

敵ではないが味方とも言えるかわからない人物に皆は頭を悩ませるのであった。

「ヘックシヨン!...埃かな?」

名無しことアクセルは自分が噂されていることを知らず、1人で拠点の掃除に励むのであった。

第15話

Y月I日

ふう〜だ、いぶ時間はかかったけど、どうにか掃除が完了したぜ！

とはいえ流石に疲れたよ〜。

こういうときはソファに寝そべてくつろぐのが一番だ。

そうだ！街で買ったシェリルのCDを聞こう！

CDケースからCDを取り出して、CDプレーヤーにセットする。

プレーヤーから流れる曲は射手座座☆午後九時Don't be lateという曲だ。

う〜んいい曲だなあ。

何だか聞いているうちに気分が高揚するような気がするよ。

ああ！それにしてもこうやってくつろぐことができるなんて、何て素晴らしいんだ！

俺はこういうのを待ってたんだ！

気分が高揚しているせいか、若干ハイになっているアクセルの下に通のメールが届いた。

………何でこんな時に来るんだよ。

差出人が誰かわかっているアクセルは、せっかくの至福の時間を邪魔されたせいで気分が萎えてしまった。

メールに目を通すと、内容はユーラシア大陸の東部で大規模に展開されている獣人を撃退しろだった。

補足としてZEXISも参加するようだ。

いきたくはないがそういう契約をしたため、アクセルは渋々とヴァイサーガで出撃するのであった。

「しくったなあ……」

アクセルこと俺はボートマンの指示でユーラシア大陸東部に来ていた。

そこで攻撃目標であると思われる獣人のガンメン部隊を発見した。

俺はその中でこれまでのガンメンとは比べ物にならない戦艦タイプのガンメンを攻撃することに決めた。

あの戦艦タイプが旗艦と判断して強襲した結果、戦艦タイプとガンメン部隊に損害を与えることに成功した。

しかし、こちらも無傷というわけにはいかなかった。

機体の性能をMAXに強化したことで油断していたせいで、ガンメンではない黒色の機体の銃撃を直撃してしまった。

そのあとにウルト○○○^{ビィ}のようなトサカをつけた白いガンメンの、トサカを外しての斬撃も食らってしまった。

「あれどう見てもアイ○○○^{ビィ}ガードだよな」

どうにか後退した俺は獣人が襲撃したと思われる街の近くで機体を修理することに決めた。

流石に街の中で修理するわけにはいかないので、街から少し離れたところに隠した。

いくら強化パーツのアルティメット細胞があるとはいえ、いつ修復完了するかわからない。

そのために自分でもできることはと思い、ハ口指導の下修理を始めた。

時間がかかる部分にはアルティメット細胞で修復してもらい、アクセルは簡単に修理できる部分を修理することにした。

そうして修理してる中、足りない部品があることが発覚した。

「○○○はアルティメット細胞で修復させるべきか？でも無駄に時間をかけるわけにもう〜ん……とりあえず街に必要な部品があるか見てみるか」

街で修理に必要な部品があるか見に行き、その間に時間がかかる部分をアルティメツト細胞での修復を続行することに決めた。

後にアクセルはこの選択に再び後悔するのであった。

「あ、アクセル!?!」

聞き覚えのある声に振り替えると、そこには赤いポニーテールの少女ヨーコがいた。

近くには仲間と思われる者達がいた。

「……久しぶりだな、ヨーコ」

まさかの再会にアクセルは内心焦りまくっていた。

「何が久しぶりよーあのあと姿が見えなくて心配したんだからー」

「あのあと色々あったんだ。だけど、心配かけてすまなかった」

下手な言い訳は怪しまれかねないので、アクセルは素早く謝ることにした。

「ヨーコ、知り合いか?」

そこへ上半身裸に袴だけの男がヨーコにアクセルのことを聞いてくる。

「(この男は……ああ、あの時文句を言ってきた奴か)」

ガンメンに囲まれた中で啖呵を切ろうとし、突然現れたヴァイサーガに啖呵を中断させられたことに対して文句を言ってきたので覚えている。

まさか文句を言ってくるとは思わなかったのだ、あれは印象に残ったものだ。

「ふうん？ お前がヨーコがよく話してたアクセルか」

「よく話してた？」

「な、何言ってるのよカミナ!？」

カミナという男の言葉にヨーコは慌てだしていた。

「ちなみにどんなことを言っていたんだ？」

「えっと、確か……」

話そうとしていたカミナの顔に超電導ライフルが突き付けられていた。

「変なこと言ったら撃つから」

下手に何か言おうなら撃つ気満々の様子に、カミナは何も言わなくなった。

「と、とりあえず元氣そうでよかったよ。それじゃ俺は……」

「ちよつと、どこに行く気？」

ライフルの銃口がカミナから今度はアクセルに向けられた。

「いや、えーとだな……」

突き付けられたライフルにどう答えるべきか迷い始める。

「そうだ！ アクセルあんたにも偵察を手伝ってもらおうよ」

何がそうだと反論したいが、何も言わずに去って心配させてしまったこともある。

そのため、アクセルは仕方なくヨーコ達の偵察を手伝うことになるのであった。

第16話

Y月J日

あれからアクセルはなし崩し的に、ZEXISのメンバーと偵察任務に同行することになってしまった。

やばい……これはヤバいぞ……。

ZEXISも来ることは知っていたけど、まさかヨーコ達がZEXISのメンバーだったとは。

そんな焦燥感を抱いたままアクセルはヨーコ達と共に行動していると、彼らの前に人間掃討部隊隊長のヴィラルと客分であるティンプが現れた。

そして、指揮官である螺旋四天王一人、怒涛のチミルフというゴリラの獣人が現れた。

……ん？この声ってあの時の戦艦ガンメンの指揮官だよな？

ということはあるヴィラルがトサカのガンメンのパイロットで、ティンプがああ黒い機体のパイロットなのかな？

チミルフ達はZEXISに宣戦布告してきたけど、戦えるの？

だって少し前に俺との戦闘で部隊に大きな損害が出たはずだけど。

とはいえ、宣戦布告したらチミルフ達は踵を返して去っていた。

まさかあの時戦った獣人の部隊と会うとは何とも奇遇というべきか。

まあ、獣人たちは俺がヴァイサーガのパイロットとは知らないからわからないけど。

一方、宣戦布告されたヨーコ達のほうは上等だといわんばかりに燃えていた。

カミナたちは迎撃の準備を整えるために本隊のところに戻り、ヨーコも俺にこの辺りは危険になるから非難するように言って戻って行った。

俺はヨーコに気を付けるように言うと、ヨーコは手を振って返してくれた。

Y月K日

チミルフ率いる部隊とZEXISの戦い、この日一人の男が死んだ。

俺はその男のことはよく知らないが、一つだけ言えることは人を惹きつける何かがあった。

短い時間だったが、その男は勇敢で強い心を持つ男だった。

俺はそれだけは断言して言えた。

カミナ、グレン団の鬼リーダーであり、ZEXISのメンバーから頼られていた男。

ZEXISとチミルフ率いる獣人部隊の戦いは、途中で現れたインベーターという化け物の邪魔が入った。

それでもインベーターを撃退し、グレンラガンが頭部を敵の旗艦に投げ込んで奪取で

きると思っていた。

しかし、どういうわけか敵の旗艦は制御できないトラブルが発生するも、カミナの一撃で敵の旗艦を奪取に成功した。

遠くで見ていた俺やZEXISのメンバーも勝利を確信していた。

その油断が一人の漢を死なせてしまった。

敵の旗艦から一機のガンメンがグレンを強襲した。

それはチミルフの専用ガンメンでビヤコウだった。

態勢を立て直せないグレンにビヤコウは必殺の一撃を放った。

その一撃にグレンは撃墜されかけるもどうにか立ち上がった。

そして、再びラガンと合体してグレンラガンになり、カミナは文字通り最期の力を振

り絞ってチミルフを倒した。

ZEXISは確かに螺旋四天王のチミルフを破って戦艦を奪い勝利した。

その代わりにカミナという大きな代償を払って。

この時、俺は自分が最低だと思った。

ZEXISなら問題なろうと思って何もしなかった。

もし、自分が参戦していればカミナは死ななかつたかもしれない。

俺が参戦してもこの結末は変わらないのかもしれない。

だけど、俺は何もしなかった。

ヴァイサーガという力があつたのに。

そんな後悔の念を胸に抱きながら俺は日記をとじた。